



志度高だより

一飛翔の窓一

第99号  
(H22.6.18.)

「形見の背広」

私が現在着ている背広のほとんどは、二十年以上も前に仕立てたものである。最初の一着は、長女が生まれた二十八歳のときであった。駆け出しの教師だった私の給料では、とても手が出ない代物だった。「お父さん、そんなお金ありませんよ。それに子供が生まれたばかりだし」と断ったのだが、「金のことは心配せんでいい」と、無理矢理義父にある仕立屋さんのところに連れて行かれた。紹介されたのが伊藤さんだった。今里にある伊藤さんの家の居間で茶をすすっているときでも、なんとかして断ろうと考えていた。しかし、温厚な伊藤さんの顔を見ているうちに、一着仕立てることになってしまった。今にして思えば、義父の伊藤さんへの粋なはからいだったのだろう。その頃、いくら腕がよくても洋服の仕立屋として生活していくのは大変だったと思う。

私はその当時スポーツをやっていたから、通常の人より腕、胸、大腿部の筋肉が異常に発達していた。それに比べ腰回りは随分と細かった。だから既製の背広ではとても体がしっくり収まらない。いつも無理矢理体を背広に押し込んでいるという状態で、窮屈な思いをしていた。でも、所詮既製の背広とはそういうものだ、と諦めてもいた。採寸がすんでしばらく世間話をした後、一週間後に再び伊藤さんを訪ねることで暇乞いをした。

「身だしなみはちゃんとしとくもんだ」亡くなった義父がよく口にした言葉である。仕事柄、いつも背広を着ている彼らしい言葉であったが、もっぱら体操服を仕事着にしていた私は、「そうですか」などと生返事をしていた。義父はもう一つ、「男は背中が大事だ」とも言った。疲れていても背筋をピーンと伸ばし、未来を掬い取るくらいの気迫で歩けというのだ。どこかに百円玉でも落ちてないかと下を向いて歩く私にしてみれば、そんなもんですかね、とこれまた軽く聞き流していた。

一週間後、約束どおり伊藤さんを訪ねると、仮縫いができていた。言われるまま腕を通した。ところがそのときの感触が驚きであった。自分の体がストンと落ちたのだ。まるで自分を造った鋳型に落ちるように。上着を着ているのに着ていない。嘘だろう。これが背広?! 次にズボンをはいた。これにもまた驚いた。覗き込む鏡に、美しい線で輪郭された私が出た。それでも伊藤さんは私をじっくり眺め、ここをもう少し絞らないと、この辺りはもう少し丸みを持たせた方がいいね、などと何やらメモ用紙に書き込んでいた。そして仕上がった背広は、言うまでもなく申し分なかった。

「仕立てる」という言葉の意味が始めて分かった。以後、私は伊藤さんに作ってもらった背広以外着なくなった。いいものは一生もん。伊藤さんの背広がまさにそれだ。伊藤さんの背広を着ていると、ときどきいい縫いをしてますね、と声をかけられるときがある。そういうとき、自分が縫ったわけでもないのについ嬉しくなる。でしょう。見る人はちゃんと見るのだ。

でも、そんな伊藤さんともしばらく連絡を取らない時期があった。岡山大学医学部附属病院に入院していた頃である。伊藤さんは癌に冒され、一命をとりとめたものの右足すべてを失った。転移の可能性があると長期入院を余儀なくされ、天職である仕立屋の仕事を辞めた。クマゼミがいなくなりツクツクハウシが鳴き始めた八月の終わり、冬物の背広を一つ縫ってもらおうと電話したところ、奥さんから仔細を聞かされた。「まだ心と体が十分でなくて……」と歯切れの悪い言い方に、伊藤さんの行く末を想像した。

ところが、それから五年くらいして一本の電話が家にかかってきた。「伊藤ですけど」そう言われてもどこの伊藤さんかわからず、「どちらの伊藤さんでしょうか」と聞き返すと、「洋服の伊藤です」と返事があった。細い声だったが、伊藤さんの声に間違いなかった。失礼だが、私は伊藤さんはすでに他界しているものとばかり思っていた。私が躊躇していると、伊藤さんの方からそれまでの経緯を語ってくれた。いろいろ大変だったが、やっと気持ちの整理がついたとのことだった。真面目な人柄だけに、感慨深いところがあるのだろう、電話の向こうで涙ぐむ伊藤さんの姿が浮かんだ。しばらくの沈黙の後、伊藤さんは意を決したように言った。「最後に一着だけ背広を縫わせてもらいませんか。自分の最後の仕事にしたいんです」「私でいいんですか」「はい。あなたの背広を縫わせて欲しいのです」私が二つ返事でOKしたことは言うまでもない。

男は背筋をピーンと伸ばし、未来を掬い取るくらいの姿勢で歩くもんだ。義父の言葉が蘇る。伊藤さんの背広を着ると背筋がピーンと伸びる。いい背広だ。伊藤さん、あなたは最高の仕事人だった。私の背広はあなたの形見です。死ぬまで大事に着させてもらいます。伊藤さん、ありがとうございました。

